地域一体化するイタリア有機農業（下）

—農的社会デザイン研究所代表・蔦谷栄一—

イタリアでは、小規模家族農業を中心にし、環境保全や文化の振興と一体となって地域を挙げての有機農業への取り組みが広がりつつある。前回の「有機の町」についての取り組み等の報告に続き、今回は「有機地区」についてご紹介することとしたい。

蔦谷 栄一（つたや えいいち）

東北大学経済学部卒業。
1971年農林中央金庫入行、熊本支店長、農業部副部長を経て、96年7月農林中金総合研究所基礎研究部長。常務取締役、特別理事などを経て、現在、農的社会デザイン研究所代表。

〔主な著書〕
「地域からの農業再興」「共生と提携のコミュニティ農業へ」（以上創森社）「日本農業のグランドデザイン」（農山漁村文化協会）「農的社会をひらく」（創森社）など

◇一律ではないイタリア農業

イタリア西北部にあるピエモンテ州のネイヴェでの「有機の町」についての調査を終え、いったんミラノに戻った上で、「有機地区」の調査のために出直したのがイタリア南部にあるカンパーニャ州にあるチェラーゾという町である。

ミラノから特急電車に乗ってローマ、ナポリを過ぎ、サレルノまで5時間半。チェラーゾまではサレルノから車でさらに南東方向へ1時間ほど。前半の30分ほどは海岸線に沿った平地を走り、そこから傾斜地を上る。

驚いたのが途中の海岸線の平地に広がるビニールハウスの"波"である。走っても走ってもビニールハウスは続く。時速60キロメートルで走っているとして、20キロメートル以上は続いている計算になる。そして収穫を終えて間もない時期というせいもあろうが、ビニールを巻き上げたハウスも多い中、まったく人を見かけることがなく、不気味でもあった。

タクシー運転手に聞くと、この地域でビニールハウスが一面に展開するようになったのはこの10年ほどのことだという。そしてここで生産されているのは、もっぱら輸出向けの野菜だそうだ。とうてい有機栽培のようには見えないが、有機栽培であるかどうかはともかくとして、農地のほとんどはビニールで覆われ、土や緑が見えるのはごくわずかで、そのほとんどは通路。大規模かつ低コスト化を徹底したビニールハウスによる工場生産ともいうべき農場に、近代農業の究極の姿を見るような思いがした。前回述べたようにイタリアは有機農業の先進国ではあるが、一方ではこうした近代化を追求した農業も拡大しており、二極化、多様化しているのが実態ということができよう。

サレルノ近くの海岸部に広がるビニールハウス

◇AIABが主導する有機地区

ビニールハウスの"波"を通り抜け、中山間地に入ったところにある町がチェラーゾである。人口2350人の小さなコムーネ（自治体）であるが、ここにあるイタリア有機農業協会（ＡＩＡＢ）の出先を訪問し、カンパーニャ州支部代表のサルバトーレ氏にお会いして、現場をもご案内いただいた。

ＡＩＡＢは、かつてはイタリア最大の有機農業認証機関でもあったが、認証部門をＩＣＥＡとして分離独立させ、ＡＩＡＢ自体は有機推進機関として特化し、有機農業だけでなく環境保全や食文化保護も含めた活動を活発に展開している。こうした中で、「有機の町」や「有機地区」の運動を実質主導してもきた。なお、ＡＩＡＢは会員向けに、政府公認の有機認証機関の規則ではなく、内部規則によって欧州連合（ＥＵ）

の有機認証よりもさらに厳しい基準の認証を設けている。

チェラーゾはカンパーニャ州のチレント地区にある80のコムーネの一つであるが、チレント地区全体がチレントおよびヴァッロ・ディ・ディアーノ国立公園に含まれ、山岳と海、古代ギリシャの遺跡等の自然資源・観光資源に恵まれたところである。こうした自然環境を生かしてチェラーゾを含む38のコムーネが参加して「チレント有機地区」が作られている。

チェラーゾでは窓辺に花を飾ることを推進

この「有機地区」の取り組みは2019年1月で開始から15周年を迎えた。「有機地区」についての基準のようなものはなく、いい地区にしていきたいという思いを基本に地域おこしの取り組み目標を設定すればよく、その目標や取り組み内容についての議論を踏まえて加入が認められることになる。こうした中に有機農業が重要な位置を占めることになっているもので、そこにＡＩＡＢがかかわり主導していくねらいもあるように考えられる。

16年には加入している地区は27、海外からの加入もあり、ローマには世界ネットワークの事務所が置かれている。「有機地区」での取り組みや展開はいろいろのタイプがあるようだが、さまざまな要素を絡み合わせながら環境全体として生かしていくところが共通しているようだ。なお、「有機の町」がコムーネ単位でも加入できるのに対し、「有機地区」はもっと広域での取り組みであり、地域連携や循環を可能にしているように受け止められる。

◇チレント有機地区の取り組み

チレントは「有機地区」運動の発祥の地でもあり、「有機地区」としての象徴的な取り組みを積み重ねてきていることから、その経過なり展開について紹介しておきたい。

チレント地区はワイン用のブドウの生産をはじめとして果物の生産が盛んで、白イチジクは特に有名である。ひよこ豆の生産も多く、これらに有機栽培で取り組む農家の割合は高かった。ところが有機農業に取り組みながらも、販売する市場に乏しいことから販売先を広げていくことが必要だとして、カステッロ・サンロレンツォという山にある町で、市民会議を設けて町を挙げて有機農業についての議論を04年に開始した。議論が進行する中で有機農産物の販売強化と並行して環境に力を入れていくことになり、有機農家と村役場、これに消費者、手工業者、観光業者も加わって、一体となって自然景観を守っていくということで結束して運動化し、これが近隣のコムーネに広がってきたというのが流れだ。

またこの山側での動きと連動して、ギリシャの古代遺跡があり、海水浴客も多いアッセアという町でも同様の動きが持ち上がり、海側と山側とが連携することによって有機レストランの開設、学校給食での有機食材利用、自転車道の整備等、取り組みを広げてきた。

左端がサルバトーレ氏、右端がエミリオ氏

◇「農薬・化学肥料を使わないのが有機農業」を超えて

当初、チレント地区では、100軒ほどの農家が有機農業に取り組んでいたが、現在では400もの農家が認証を受けており、この他に1000以上の小規模で自給的な、認証を受けていない農家があるという。サルバトーレ氏やチレント有機地区代表のエミリオ氏は、「化学的なものを使わないとする文化が大事であり、そのシンボルとして有機農業がある」「環境と調和していくのが有機地区」と語る。農薬・化学肥料を使わなければ有機農業というレベルを超えて、文化や環境、景観と一体化して地域振興をはかっていくところに、有機農業、ひいては小規模・家族農業が生き残っていく道が開かれていることを示唆している。